



大きな椎の木のそばで下校中の下関市立檜崎小学校の児童たちと会った。

でしようねえ、と当たり前のことを聞いたら、もちろんさ、うまいからねえ、天然ものは、と笑う。やがて辞去しようとする、池田さんは、自分で狩った猪の肉をたくさんに下さった。その夜、私たちは、正真の天然猪の生姜焼きに舌鼓を打った。

しし撃つと若葉の山に犇めけり

やがて海に出た。海は油風あぶらなみというのであろう。とろりと静かに潮を湛えている。その海を指呼しこする至近に山陰本線は単線の鉄路を延はえている。「宇賀本郷うがほんごう」という無人駅に至った。この駅には、いったい一日に何本の汽車が止まるのであろうか。ここにもまったく人がなかつた。



路床ろしやう錆びて海見る駅に躑躅つづじ燃ゆ

海に沿って南下し、やがて関門海峡に出た。対岸に建物の蟻集する海峡の景色は、昔訪ねたイスタンブールを彷彿とさせて、どこか懐しい。人や物や、歴史の往来する海峡。盛り上がるようにうねりながら急な海流は大橋の下を流れてゆく。

旅の終り。私は大きく深呼吸をした。

083

この瀬戸ともしりに知盛出とももりでよ春の渦

道の辺の、古い古い農家の庭で、その家の刀自とじにこの集落の名を聞いたら「奥阿」というのだと教えてくれた。嫁に来て、もう六十年、それでもこの家は、姑から聞いたところでは、ハア三百年も経つと聞いたでねえ、と刀自は恥ずかしそうにした。江戸時代の前期、まだ井原西鶴などが生きていた時代の農家が、なんでもないことのように建っている村。ああ、こんなところがまだあるんだなあ、しばらく感慨に耽る。

そこから、取って返して、また長閑な野を西にし東ひがしするうちに、下関市と美祢市みねの境界中之岳という村に至る。かんかん照りの眩しい午後になっていた。

よく日焼けした逞しい老人が畑仕事をしている。その畑を見おろすお地蔵さんと庚申塚こうしんづか。これも懐しい景色だ。いったいここは美祢市ですか下関市ですか、と下らぬことを尋ねたら、破顔一笑して、ちやうどその道が境界線だと教えてくれた。その境界線にまたがる、この在の肝煎きまひりらしい家の主で、池田俊廣さんというのだった。

このあたりには鹿や猪がちよくちよく出て畑を荒すという。さてこそ、ここへ来る道の途中に、たくさん男達が鉄砲をもって集っていたのだ。聞けば池田さんも、鉄砲撃ちで、毎年五十頭は狩るといふ。で、その鹿や猪は、獲ったら食べるの

「下関市と美祢市の境はちやうど我が家の真ん中」と話す池田俊廣さん(左)と。

